

病害虫発生予察情報(6月予報)

平成 28 年 5 月 30 日
静岡県病害虫防除所長

1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち	発生量：やや少 (発病株率 0.6%)	前年8月中旬発生量：少(－) 前年9月中旬穂いもち発生量 ：少(－)(発生なし) 置き苗いもち：中遠2地点(＋) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：並～多い(＋)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：やや少 (発病株率 0.05%)	前年8月中旬の縞葉枯病の発生量 ：並(±) 5月上中旬のヒメトビウンカの発生量 ：水田畦畔：少(－)(発生なし) 5月中旬の中遠におけるヒメトビ ウンカのウイルス保毒率：やや少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	イネミズゾウムシ	発生量：多 (寄生株率 8.1%)	前年6月発生量：多(＋) 5月の予察灯誘殺数：少(－) 気象予報：気温：高い(＋)
	イネドロオイムシ	発生量：やや少 (東部高冷地：寄生株率 17.7%)	前年6月発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋)
	斑点米カメムシ類	発生量：多	5月上中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
ジャガイモ	疫病	発生量：やや少	5月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	ジャガイモガ	発生量：並	5月中下旬発生量：並(±) (発生なし) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
チャ	炭疽病	発生量：多 (病葉数 3.5 葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	もち病	発生量：多 (病葉数 4.5 葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：並～多い(＋)
	輪斑病	発生量：やや少 (病葉数 2.1 葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：少(－)(発生なし) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(±)
	カンザワハダニ	発生量：少 (寄生葉率 1.0%)	5月中旬発生量：少(－) 天敵(カブリダニ類)：多(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (叩き落とし虫数 19.4 頭/ 4 か所)	5月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：多 (叩き落とし虫数 2.4 頭/4 か所)	5月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 5.8 葉/1.25 m ²)	5月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
ウンシュウ ミカン	チャノキイロ アザミウマ	発生時期：昨年より5～6日早い 発生量：少 (発生果率 0.53%)	5月中旬発生量(茶)：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	ヤノネカイガラムシ	発生時期：やや早い 発生量：並 (寄生葉率 0.07%)	5月中旬発生量：並(±) (発生なし) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	ミカンハダニ	発生量：少 (発生程度 8.7)	5月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
中晩柑類	かいよう病	発病度(葉)：やや多 (発病度 0.6)	5月中旬新梢発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
ナシ	黒星病	発生量：並	5月中下旬発生量：並(±) (発生なし) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
カキ	落葉病	発生量：やや少	前年9月発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(＋)
	チャノキイロ アザミウマ	発生時期：昨年より5～6日早い 発生量：少 (寄生果率 0.03%)	5月中旬発生量(茶)：少(－) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
	フジコナカイガラムシ	発生量：並 (7月寄生果率 1.0%)	5月中旬発生量：並(±)(発生なし) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(－)
キウイフ ルーツ	かいよう病	発生量：やや多	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高(±) 降水量：並～多い(＋)
果樹全般	カメムシ類	発生量：並	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(＋) 降水量：並～多い(±)
キク (露地)	白さび病	発生量：やや多 (発病株率 2.6%)	5月上旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：並～多い(＋)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
キク (露地)	黒斑・褐斑病	発生量：やや多 (発病株率 3.1%)	5月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～多い(+)
	えそ病 (トマト黄化えそウイルス：TSWV)	発生量：並 (発病株率 0.1%)	5月上旬発生量： えそ病：少(-) アザミウマ類：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	アザミウマ類	発生量：多 (被害株率 13.8%)	5月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	ハモグリバエ類	発生量：やや少 (被害株率 0.6%)	5月上旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)
	オオタバコガ	発生量：並 (被害株率 0.1%)	トラップ誘殺量：並～少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～多い(-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2. 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

生育は平年並からやや早い状況である。

●いもち病(葉いもち)

予報の根拠

- ・ 昨年8月中旬の巡回調査では発病株率 0.24% (平年 1.39%) と平年より少なかった。また、昨年9月中旬の巡回調査では穂いもちの発生は確認されなかった (平年 0.49%)。
- ・ 中遠地区の2地点で、置き苗いもちの発生を確認した。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年よりも高く、降水量は平年並～多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 置き苗は本田に植え付けた株よりも早期に葉いもちが発生し伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・ 常発ほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 急性型病斑 (病斑周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑) が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・ 本県では MBI-D 剤 (「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤) 耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤 (「アミスター」または「嵐」を含む剤) 耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する (詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照)。

●縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

予報の根拠

- ・ 前年8月中旬の巡回調査では、縞葉枯病の平均発生株率は 0.56% (平年 0.60%) と平年並であった。
- ・ 5月中旬の中遠地区でのヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率は 4.0% (平年 5.2%) と平年よりやや低かった。
- ・ 5月上中旬のヒメトビウンカの発生は、水田畦畔雑草では認められなかった (30回すくい取り平均捕獲数: 平年 0.09頭)。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年よりも高く、降水量は平年並～多いため、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。イネが本病に感染しやすい幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。
- ・ ヒメトビウンカはコムギ収穫後に水田に侵入するため、コムギ栽培ほ場の近隣の水田では6月中下旬に本田防除を実施する。
- ・ 常発ほ場では抵抗性品種 (あいちのかおり SBL など) の作付けを進める。

●イネミズゾウムシ

予報の根拠

- ・前年6月の巡回調査では、イネミズゾウムシの平均被害株率は14.0%（平成8.1%）と平成より多かった。
- ・各地の予察灯における5月上～中旬の成虫誘殺は確認されていない（平成0.0～0.7頭／半旬）。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、薬剤を散布する。

●イネドロオイムシ(イネクビホソハムシ)

予報の根拠

- ・前年6月の巡回調査では、東部高冷地におけるイネドロオイムシの平均被害株率は2.4%（平成17.7%）と平成より少なかった。
- ・例年、6月以降は幼虫による食害が増加する。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、幼虫が発生する6月中下旬に薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類

予報の根拠

- ・5月上中旬の畦畔等の雑草におけるカメムシ類の発生は平成より多かった（30回すくい取り平均捕獲数4.5頭：平成2.7頭）。特に、田方平坦地の一部地域で多発していたため、注意が必要である。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は平成より高く、降水量は平成並～多いため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまうので、出穂10日前には除草を終了する。

<その他の病害虫>

●ニカメイガ

- ・前年9月の被害は平成より多かった（平均被害株率0.8%：平成0.2%）。
- ・5月中旬時点の予察灯およびフェロモントラップ誘殺数は平成より少なく推移している。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

- ・前年7月の巡回調査では、スクミリンゴガイの平均発生面積率は34%（平成28%）と平成よりやや多かった。
- ・移植後2～3週間は食害を抑制するため、浅水管理（4cm以下）に努める。
- ・発生地域の普通期水田では移植後の薬剤処理を実施する。
- ・6月中旬～7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【ジャガイモ】

<生育の概況等>

5月中下旬の巡回調査時では、生育は平年並であった。

●疫病

予報の根拠

- ・5月中下旬に行った巡回調査では、低率ではあるが発生が確認された（発病株率1.1%）。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・病原菌は罹病残渣や罹病イモとともに生存する。翌年の発生源となるため、収穫の終わったほ場では残渣をほ場に残さない。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・5月中下旬に行った巡回調査では発生は見られなかった（平年平均被害株率0.2%）。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・イモは露出しないよう土寄せをして産卵を防ぐ。掘り取ったイモは産卵防止のため覆いをかけ、刈り取った茎葉などと離し、早めに屋内に搬入して覆いをする。
- ・イモの残渣は発生源となるのでほ場に残さない。

<その他の病害虫>

●黒あざ病

- ・5月中下旬の巡回調査では複数のほ場で発生がみられた。
- ・激発すると地際や地中茎部に褐色病斑を生じ、茎部では腋芽が肥大して気中塊茎を生じる。新塊茎上には黒いあざ状に盛り上がった菌核が形成される。
- ・病原菌は塊茎上や植物残渣、土壌中で生存し伝染源となる。

防除対策

- ・ほ場から残渣を持ち出すとともに土壌消毒を行う。
- ・健全な種いもを使用し、植えつける際には種いも消毒を行う。

【チャ】

<生育の概況等>

5月中旬の巡回調査時では、一番茶の摘採は終了していた。

一番茶の摘採時期は、平年並～平年より2日から5日ほど早まった。

●炭疽病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、一番茶摘採残渣や遅れ芽で5.4葉/1.25㎡(平年3.1葉/1.25㎡)の発生が見

られ、平年よりやや多かった。地域別では、富士山麓地域 7.7 葉/1.25 m² (平年 2.3 葉/1.25 m²)、静岡市北部地域 11.7 葉/1.25 m² (平年 3.6 葉/1.25 m²) と発生が目立った。

- ・感染には新芽生育時に 10 時間以上の濡れが必要である。1 ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～多いことから、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨期となる 6 月は感染機会が多くなる。例年、発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を 2 回実施する場合には、1 回めに予防剤を使用し 2 回めに治療剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、一番茶摘採残葉や遅れ芽で 4.2 葉/1.25 m² (平年 0.8 葉/1.25 m²) の発生がみられ、平年より多かった。特に山間地及び日陰の部分では、一番茶で発生がやや多かった。
- ・新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1 ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～多いことから、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・高湿度条件下で胞子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では発生しやすい。潜伏期間が 10 日程度と短いため、二番茶摘採期の頃に発生する。例年発生の見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を 2 回実施する場合には、1 回めに予防剤を使用し 2 回めに治療剤を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、一番茶摘採残葉で発生は見られなかった (平年病葉数 0.2 葉/1.25 m²)。
- ・一番茶の摘採は平年並～5日早かったことから、二番茶の生育や摘採も早くなることが予想される。主な発病部位は、摘採時の傷口であるため、摘採の早期化に伴ない発生時期も早くなることが予想される。
- ・発病は 25℃以上の高い気温が好適である。1 ヶ月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口から発病が始まるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より 2 cm 程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は 0.7% (平年 4.0%) で、平年に比べ発生は少なかった。一方、天敵のカブリダニ類の叩き落とし虫数は 2.0 頭/4 か所 (平年 1.3 頭) と平年より多かった。
- ・現在一部に多発の報告があるが、例年、6月の発生は天敵のカブリダニ類により抑制される。
- ・1 ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、カブリダニ類の増殖に好適である。

防除対策

- ・天敵の活動等により6月は5月に比べ発生は少なくなるが、現在、発生が多い茶園では早めに防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は4.4頭/4カ所（平年11.8頭/4カ所）と、平年より少なかった。
- ・例年、二番茶生育期から発生が増加する。1ヶ月予報では、6月の気温は高いが、降水量は平年並～多いと予想されるため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・二番茶以降の新芽萌芽から開葉期にかけて防除を実施する。
- ・一番茶の摘採が早かった茶園では、二番茶の生育も早く、虫の発生も早まる可能性があるため、防除が遅れないようにする。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加する可能性があるため、発生状況に注意し再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は2.7頭/4カ所（平年1.2頭/4カ所）と平年より多かった。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は高いが、降水量は平年並～多いと予想されるため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。現在、発生が多い茶園や摘採が遅い茶園では、早めに防除を行う。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加すると被害が大きくなるため、発生状況に注意し再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.5葉/1.25㎡（平年1.6葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・県内各地のフェロモントラップへの誘殺時期は東部で早く、誘殺虫数は平年並である。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は高いが、降水量は平年並～多いと予想されるため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・本年は成虫発生期が早まっているが、幼虫の発生が新芽生育期に合致すると被害が大きくなるため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお、成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページで情報提供している。

<その他の病害虫>

●ナガチャコガネ

防除対策

- ・成虫は年1回6月頃に発生するので、成虫発生初期(6月上中旬)に被害が出た部分とその周辺の雨落ち部に薬剤を処理し土壌混和する。
- ・成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページで情報提供している。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

生育、開花期ともに平年よりやや早く、着花量は園や木によってばらつきが大きい。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・チャの巡回調査における発生量は平年より少なく、1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、6月のミカン園における発生量は平年より少ないと予想される。
- ・アメダス気象データを用いた予測によると、5月25日以降の気温が平年並で推移した場合、第2世代成虫の発生時期は6月2日～9日で、発生時期は昨年比べて5～6日早いと予想される。各産地における発生時期の予想は、病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・各世代の飛来ピーク時期の1週間前からが薬剤防除適期である。飛来ピークは年次や産地によって異なるので、病害虫防除所ホームページの情報を参考にして防除を行う。
- ・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

●ヤノネカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月の巡回調査では本種の発生はみられず(平年0.03%)、平年並みの発生であった。
- ・県予察ほ場(静岡市清水区駒越西)では1齢幼虫の初発日は5月6日で、平年より4日早かった。防除適期の2齢幼虫最多発生時期は6月中旬と予想される。
- ・1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・天敵により本種の発生が少ない園では防除を行わなくても良いが、発生の見られる園では2齢幼虫最多発生時期に薬剤散布する。
- ・6月中旬～下旬の薬剤散布は枝や葉に対する寄生の防止と次世代の発生量を少なくする効果がある。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・5月の巡回調査では平均寄生葉率は2.1%(平年3.0%)で平年より少ない発生であった。

- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いが、本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 最近は土着天敵の利用により6月の防除を省くほ場が多い。ただし、寄生葉率が30%を超えるほ場では、寄生密度を下げるために薬剤による防除を行う。

<その他の病害虫>

●黒点病

防除対策

- ・ 通常第1回目の防除は6月上～中旬である。しかし、病害虫防除員等からの報告によると、本年は開花期が平年より3～7日程度早く、その後の果実の生育も平年より早まることが予想される。また、気象の1ヶ月予報では、降水量は平年並～多いと、感染に好適な条件が続くことが予想されるため、第1回目の防除を開花時期にあわせて繰り上げる必要がある。
- ・ 第2回目の防除は散布間隔25～30日又は累積降水量250～300mmを目安に行う。各産地における第2回目の防除適期の予想は、病害虫防除所ホームページを参照。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 5月の巡回調査では新葉での発病度は0.1（平年平均発病度0.03）と平年よりやや多かった。
- ・ 病原菌は、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴と共に飛散し伝搬し、新葉が硬化する以前に気孔や傷口から感染する。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 6月の降雨により感染が拡大する可能性がある。
- ・ 新梢に発病が見られるほ場では、降雨前に銅水和剤または抗生物質の散布を行う。なお、銅水和剤の散布では薬害を防ぐため炭酸カルシウム剤（200倍）を加用する。

【ハウスミカン】

<その他の病害虫>

●ミカンキイロアザミウマ

防除対策

- ・ 着色期の発生に注意し、初期防除に努めるとともにハウス内外の除草を徹底する。また開口部（側窓、天窗）に防虫網または遮光ネットを張り、本種のハウス内への侵入を防ぐ。

【ナシ】

<生育の概況等>

生育は平年並～2日程度早い。

●黒星病

予報の根拠

- ・ 5月の巡回調査では一部の常発園を除いて発生はみられなかった。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 耐性菌の発生を抑えるため保護殺菌剤の予防散布に重点を置き、DMI剤（アンビル、インダー、オーシャイン、スコア、トリフミン、マネージ）の連用を避ける。

<その他の病害虫>

●黒斑病

防除対策

- ・ 幸水、豊水、静喜水は抵抗性品種で防除の必要はない。新水、喜水は罹病性品種で発病しやすいため、防除を行う。
- ・ 6～7月が発病まん延期であり、降雨状況に合わせて防除を行う。

【カキ】

<生育の概況等>

生育は4日程度早い。

●落葉病

予報の根拠

- ・ 昨年9月の巡回調査では発病葉率は0.4%であった（平年発病葉率1.6%）。
- ・ 主感染時期の5月上旬～7月上旬に降雨が多いと発生が多い。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は罹病した落葉が主要伝染源で、5～7月に感染し、60～120日の潜伏期間後発病する。8月以降の散布では殆ど効果がないので、5～7月の降雨前に予防散布を行う。
- ・ また、本病は根が障害を受けやすいほ場で、肥料不足、長雨などにより樹勢の弱った木に発生しやすい。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ チャの巡回調査における発生量は平年より少なく、1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年～多いため、6月のカキ園における発生量は平年より少ないと予想される。
- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、5月25日以降の気温が平年並で推移した場合、第2世代成虫の発生時期は6月2日～9日で、発生時期は昨年と比べて5～6日早いと予想される。
- ・ 各産地における発生時期の予想については、病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・ 本種は開花期に飛来し7～8月まで加害する。初期防除が重要で、開花初期から花卉落下期までの防除を徹底する。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・ 5月中旬に行った巡回調査では、果実には発生は見られなかった（平年寄生果率 0.2%）。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。
- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、5月25日以降の気温が平年並で推移した場合、西部地域における防除の時期となるふ化ピーク～2齢ピークは6月8日～28日となる。

防除対策

- ・ 例年この時期の発生は少ないが、7月以降に果実のへた部等で寄生がみられる。
- ・ 昨年発生が見られた園では発生に注意し、6月中旬の第1世代の若齢幼虫の発生時期に防除を行う。第2世代と第3世代では様々な齢期の個体が混在する上、果実の肥大によって生息場所である果実とへたの隙間が狭くなり薬剤が到達しにくくなることから、防除効果が上がりにくい。

【キウイフルーツ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 5月の巡回調査では、発病葉率は1.5%（平年値なし）であった。
- ・ 本病の発病適温は10℃～20℃であるが、6月中も病原菌は風雨により飛散し気孔や傷口から感染する。1か月予報では、気温は平年より高いが降水量は平年並～多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。そのため防除は予防対策が中心となる。
- ・ 受粉結実後～果実肥大期までにコサイド3000を予防散布する。散布にあたっては、薬害軽減のためクレフロンを加用する。
- ・ 管理作業によっても感染するため、せん定器具はこまめに消毒する。
- ・ キウイフルーツは風に弱く傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。
- ・ 詳細な防除方法については農林水産省の技術情報のページ (<http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryoku2/>) のうち、「キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統の当面の防除対応マニュアル」、「かいよう病まん延防止パンフレット」等を参考にする。

【果樹全般】

●カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

予報の根拠

- ・ 5月中旬に行ったカンキツの花での叩き落とし調査では、平均寄生虫数は0.7頭/5着花枝（平年平均寄生虫数 1.3頭/5着花枝）と平年よりも少ない発生であった。
- ・ 冬季に行った落葉中のチャバネアオカメムシ越冬量調査では、越冬成虫は0.7頭/m²（平年平均越冬虫数

0.8頭/m²)と平年並であった。

- ・県内6カ所に設置しているカメムシ類のフェロモントラップでの、5月1日～25日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが50.8頭/箇所(平年84.1頭)で平年より少ない発生であった。また、ツヤアオカメムシが25.7頭/箇所(平年27.5頭)で平年並の発生だった。

防除対策

- ・例年ウメ、モモ、ビワは収穫期まで被害果が発生する。カンキツ、カキ、ナシ、キウイでは本格的なカメムシの被害は7月以降になる。
- ・スギ、ヒノキの近くにある果樹園では、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。
- ・本年のチャバネアオカメムシ越冬数、フェロモントラップ・予察灯誘殺数の詳細は病害虫防除所ホームページに掲載している。

【キク(露地)】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・5月上旬の巡回調査では、親株の平均発病株率は18.0%(平年5.1%)と平年より多い発生であり、特に一部のほ場で多発していた。
- ・1ヶ月予報では、6月の降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、発生を特に助長しない。

防除対策

- ・発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、親株の平均発病株率は24.9%(平年8.7%)と平年より多い発生であった。
- ・1ヶ月予報では、6月の降水量は平年並～多いが、気温は平年より高いため、発生を特に助長しない。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる

株を親株として用いない。

●えそ病(トマト黄化えそウイルス:TSWV)

予報の根拠

- ・ 5月上旬の巡回調査では、親株の発病は確認されなかったが（平年0.1%）、アザミウマ類による親株の被害株率は平年より多かった。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年よりも高いが、降水量は平年並～多いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類(クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

予報の根拠

- ・ 5月上旬の巡回調査では、親株の平均被害株率は46.4%（平年17.2%）と平年より多かった。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高いが、降水量は平年並～多いため、本虫の増殖をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 定植後の初期防除に努める。
- ・ 親株は発生源となる可能性があるため、採穂後は親株をほ場に放置せず、速やかに処分する。

●ハモグリバエ類(マメハモグリバエ)

予報の根拠

- ・ 5月上旬の巡回調査では、親株の平均被害株率は1.1%（平年7.6%）と平年より少なかった。
- ・ 夏期はハモグリバエ類の天敵（寄生蜂）の活動により密度が抑制されやすい。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 葉に1mm程度の白い斑点（産卵痕及び摂食痕）が多数見られる場合は薬剤散布を実施する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップによる発生調査では、オオタバコガの発生量は平年並～少なく推移している（タバコガ類の誘殺消長は病害虫防除所ホームページを参照）。
- ・ 1ヶ月予報では、6月の気温は平年より高く、降水量は平年並～多いため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 例年7月以降に幼虫の発生が増加するが、6月から芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成28年5月26日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 5月28日から6月27日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 5月28日(土)～6月27日(月)
- 1週目 : 5月28日(土)～6月3日(金)
- 2週目 : 6月4日(土)～6月10日(金)
- 3～4週目 : 6月11日(土)～6月24日(金)

(2) 3か月予報（東海地方 平成28年5月25日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 6月から8月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

6月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

7月 平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			6月			7月			8月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	40	40	20	40	40	30	40	30	20	40	40

【降水量】

3か月			6月			7月			8月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
20	40	40	30	30	40	20	40	40	30	40	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	6月	7月	8月	6月	7月	8月
浜松	22.0	25.7	27.0	241	190	151
静岡	22.0	25.7	27.0	293	278	251
三島	21.9	25.6	26.8	228	213	209

* 降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 28 年度 技術情報第 2 号
キク（露地） 白さび病

平成 28 年 5 月 30 日
静岡県病害虫防除所長

県西部地域のキクほ場（露地）で白さび病が多発しています。
被害の拡大が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

5月上旬に県西部地域で行ったキク（露地）の親株ほ場の巡回調査において、白さび病による被害株率が18.0%（平成5.1%）と高く、特に一部のほ場と品種で多発していた（表1、図1）。今後は本ほでの被害も予想されるため注意が必要である。

2 防除方法

- （1）り病性品種を中心に、親株ほ場における防除を徹底して行い、本ほでの発生を少なくする。
- （2）薬剤によっては葉害が出やすいため、新しい品種では小規模の試し散布を行う。また、耐性菌の発生を抑えるため、同一成分の薬剤の連用は避ける。
- （3）発病した葉や植物体は感染源となるため速やかにほ場から除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- （4）本病は多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に発生に注意する。

表1 県西部地域のキクほ場における白さび病の発生状況

調査項目	5月上旬
被害株率	18.0
(%)	(5.1) ¹⁾
被害面積率	44.0
(%)	(31.0)

1) ()内は過去10年間の平年値を示す



図1 被害の様子

表2 キクの白さび病に対する主な防除薬剤¹⁾

系統名	FRAC コード	商品名	使用方法	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の 使用回数
アミド系殺菌剤	7	アフェットフロアブル	散布	2000倍	発病初期	3回以内
		アンビルフロアブル	散布	1000倍	発病初期	7回以内
ステロール 生合成阻害剤	3	サブロール乳剤	散布	1000～1500倍	-	5回以内
		トリフミン水和剤	散布	1000倍	発病初期	5回以内
		ラリー乳剤	散布	3000倍	発病初期	5回以内
ストロビルリン 系殺菌剤	11	アミスター20フロアブル	散布	2000倍	発病初期	5回以内
		ストロビーフロアブル	散布	2000～3000倍	発病初期	3回以内
有機硫黄殺菌剤	M3	ステンレス	散布	2000～3000倍	-	8回以内
その他	39	ピリカット乳剤	散布	1000倍	発病初期	6回以内

1) 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp/>) に掲載されている薬剤から抜粋 (平成28年5月30日時点JPP-NET配信データによる)

【問合せ先】 静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

平成 28 年度 技術情報第 3 号
キク（露地） アザミウマ類

平成 28 年 5 月 30 日
静岡県病害虫防除所長

県西部地域のキクほ場（露地親株）でアザミウマ類が多発しています。
被害の拡大が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

5月上旬に県西部地域で行ったキク（露地親株）の親株ほ場の巡回調査において、アザミウマ類による被害株率が46.4%（平年17.2%）と高く、特に一部ほ場で多発していた（表1、図1）。今後は本ほでの被害も予想されるため注意が必要である。

2 防除方法

- （1）親株ほ場は栽培ほ場と隔離する。また、親株での防除を徹底して穂・苗からのアザミウマ類の持ち込みを防ぐ（表2）。
- （2）育苗期～定植初期の被害が多い。また、葉が一度食害されると食害の痕が残り続けるため、生育初期段階から防除を行う。下葉や葉裏にも薬液が十分かかるよう散布を行う。
- （3）優占種のクロゲハナアザミウマはキク科やキンポウゲ科を中心とした多くの雑草に寄生するので、ほ場周辺の除草を行う。
- （4）施設栽培では出入り口や側窓部に防虫網（目合い1mm以下）を張り、侵入を防ぐ。

表1 県西部地域のキクほ場におけるアザミウマ類の発生状況

調査項目	5月上旬
被害株率	46.4
(%)	(17.2) ¹⁾
被害面積率	89.0
(%)	(85.0)

1) () 内は過去10年間の平年値を示す



図1 被害の様子

表2 キクのアザミウマ類に対する主な防除薬剤¹⁾

系統名	IRAC コード	商品名	使用方法	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の 使用回数
有機リン系	1B	トクチオン乳剤	散布	1000倍	発生初期	5回以内
ネオニコ チノイド系	4A	アドマイヤー1粒剤	散布	3kg/10a	生育期	5回以内
		アドマイヤー フロアブル	散布	2000倍	発生初期	5回以内
		ダントツ水溶剤	散布	2000倍	発生初期	4回以内
スピノシン系	5	スピノエース 顆粒水和剤	散布	5000倍	発生初期	2回以内
フェニル ピラゾール系	2B	プリンスフロアブル	散布	2000倍	発生初期	5回以内
	2B	プリンス粒剤	植溝土壌 混和	6kg/10a	定植前	1回
昆虫成長制御	15	カウンター乳剤	散布	2000倍	発生初期	5回以内
その他	21A	ハチハチ乳剤	散布	1000倍	発生初期	4回以内

1) 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp/>) に掲載されている薬剤から抜粋 (平成28年5月30日時点JPP-NET配信データによる)

【問合せ先】 静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>